イエスは神

イエスは神です。イエスは永遠に神なる父と同格です。彼は私たちの罪の身代わりとなって死ぬために人間となられましたが、常に神であることには変わりありません。

> **「トマスは答えてイエスに言った。『わが主よ。わが神よ。』イエスは彼に言われた。『あなたは私を見たから信じたのですか。見ないで信じる者は幸いです。』」 (ヨハネ伝20章28ー29節)**

(参照聖句、ヨハネ伝1:1、8:58、10:30;第1テモテ3:16;テトス2:13;コロサイ人2:2;ヘブル人1:8)

イエスの神性を否定する者は皆、永遠にとがめられます。イエスは次のように言っています。

> **「あなたがたが来たのは下からであり、私が来たのは上からです。あなたがたはこの世の者であり、私はこの世の者ではありません。だから私は、あなたがたは自分の罪のうちに死ぬであろうと言ったのです。もしあなたがたは私のことを信じなければ、あなたがたは自分の罪のうちに死ぬのです。」 (ヨハネ伝8章23ー24節)**

(参照聖句、ヨハネ伝11:25 - 27、20:31;使徒行伝9:20、16:30 - 31;第1ヨハネ5:13)

どうして神は人となられたのでしょうか。

5ページの所で学んだように、神は永遠に神聖でどんなに小さな罪でも神を永遠に傷付けるのです。それ故、どのような罪にもその代価を要求されるのです。この代価を支払うのに二つの方法があります。一つは、本来有限である人間自ら神の怒りを永遠に受け続けること。もう一つは、永遠なお方が有限なこの世の人に代わって神の怒りを、一度だけ受けることです。どちらの方法も罪に対する支払いは完全になされます。

1. 有限である人間が自分の罪の支払いをするとしたら、神の怒りを永遠に受け続けなければなりません。だから地獄は永遠なのです。

2. 無限な神が人となったイエスが、人間の罪に対する無限な支払いをするため、神の怒りを受けられることです。イエスは神である故、十字架の上で無限に神の怒りをこうむった意味があります。イエスの死は、すべての時代のどの人にも適応する罪の代価を完全無欠に支払って下さいました。

この完全無欠の支払いは、すべての人の罪になされました。しかし神は私たちに二つの方法のどちらを選ぶ自由を与えております。それはイエス・キリストか永遠の裁きである地獄かです。

ルカ伝13章1ー5節に、エルサレムにあるシロアムの塔が事故で倒れて、18人の人が死んだという話があります。ユダヤ人はとかく因果関係で判断します。宗教偽善者こそ、だれよりも罪深い人だと思っていた者もいました。しかし神だけが人の心の本当の思いを知っておられるのです。たまたまこれらの18人は町で一番罪深い人だったので不慮の事故死にあったのだろうと判断してしまいました。人々はさらに理屈を重ね、この事故に会わなかった人々こそ神のさばきを受けない善良な者だと思いました。はたして人は、ある程度の良い行いを続けることにより、神のさばきを受けないですむのでしょうか。このような人は、永遠のさばきの対象になると、イエスは警告なされました。さらにこのような者こそ悔い改めなければならないと言われました。人は自分の努力に頼ることによってではなくただイエスを信じる信仰によってのみ救われるのです。

ヘブル人9章9ー14節には、規定とか儀式に従うことによって人は神に近付こうとしますが、それは本質とはほど遠い、「死んだ行ない」にすぎません。ヘブル人の前半の6章1節では、信仰の基本は、「死んだ行ないの悔い改めと、神に対する信仰」だと教えています。つまり人は神を真剣に信じる前に、「死んだ行ない」(儀式、規定など)に頼るのをやめるべきです。

聖書は、はっきり示しています。もし人は自分の信じる宗教によって天国に行けると思うなら悔い改めなければなりません(マタイ伝3:7ー9)。あるいはもし神の律法に忠実であることによって天国に行けると思うなら、悔い改めなければなりません(ルカ伝13:1ー5)。あるいはもし儀式や規定に従うことによって救われると思うなら、悔い改めて、そのような考えを捨てなければなりません(ヘブル人6:1)。この小冊子の14ページの所で、述べたように、贈り物に対して支払いをしようとした人は、その差し出したお金をひっこめて、素直に永遠の命を贈り物としていただく必要があります。

たとえ罪の身代わりに死んで下さったイエスを信じても、一方では洗礼をしなければ救われないとか、教会に通わなければ救われないとか、十戒に従わなければ救われないとか言うのであれば、その信仰は本質を失っているかもしれません。人は信仰に何かを付け加えることによって天国に行けるのではありません。人はあくまでキリストを信じる信仰以外のなにものによっても救われない事を肝に銘じる必要があります。